

# 国際開発研究フォーラム

FORUM OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT STUDIES

## エスニック・アイデンティティと言語

—ハンガリーにおけるロマニ語話者の言語認識の観点から—

加藤由香子

Ethnic Identity and Language:  
Linguistic Affiliation of Romani Speakers in Hungary

*Yukako KATO*

45-1

名古屋大学大学院国際開発研究科  
GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT  
NAGOYA UNIVERSITY

# エスニック・アイデンティティと言語

——ハンガリーにおけるロマニ語話者の言語認識の観点から——

加藤由香子\*

Ethnic Identity and Language:  
Linguistic Affiliation of Romani Speakers in Hungary

*Yukako KATO*

## Abstract

This paper examines how Romani-Hungarian bilingual speakers in Hungary perceive their language and ethnic belonging. Little attention has been paid to the Romani speakers in Hungary, on the grounds that most Roms are linguistically assimilated into Hungarian monolinguals. Due to the 'Roma' nation building on-going domestically and internationally, the Roms tend to be treated as homogeneous. Consequently, little is known about the sentiments of Romani speakers concerning their language and identification.

Since there are two major dialects of Romani in Hungary, Vlax and Carpathian, the author compared and analyzed the descriptions of their language/dialect and of 'us' and 'them', first from published books by these two dialect speakers, then from interview data of them, applying a framework of semiotic processes of language ideology of differentiation, *iconization*, *fractal recursivity* and *erasure*, proposed by Irvine and Gal.

The results of the comparison showed that all the Vlax informants embraced transnational Roma-ness while Carpathian ones were varied - some embraced Hungarian-Roma identity and others shared affinity with Vlax speakers. The analysis revealed that those who differentiated their own dialect as the authentic one created a dichotomous relationship such as Roms versus non-Roms within the Roms themselves while those who emphasized linguistic similarity and mutual comprehensibility between the dialects had a sense of transnational Roma-ness. The findings suggest that the Roma-ness is linked with and supported by the Romani language ideology, "all dialects are equal".

## はじめに

ロマ又はジプシーと呼ばれる人々はヨーロッパの少数民族の中で人口は最も多いが社会的には最も弱者であるといわれている。西欧では移動民として有名だが、彼らの多くが住む中・東欧諸国では定住しており、社会主義体制下においては労働者階級に組み込まれていた。1989年の東欧革命後は、世界銀行、EUなど様々な国際機関が彼らの社会的包摂を推進するための事業や施

---

\* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

策に取り組んでいる。ロマの知識人による権利運動も盛んであり、ロマであることに誇りを持たせようとする教育プログラムやキャンペーンも活発に行われている<sup>1)</sup>。花崎 (2001: 129) によると「平等の主張を伴って顕揚されるエスニック・アイデンティティは支配的価値観を問い直すはたらきを持ち、共生への推進力となりうる」。しかし、Vermeersch (2005: 461, 466) によれば、ロマの人々の民族運動を通して強化されるのはマジョリティ文化との本質的な差異であり、ゲットー化された村に住む貧しいロマといったネガティブな表象であるという。その結果、エスニック・アイデンティティに帰属したくても帰属できない人々が生じる可能性があるのではないかと推測できる。

本稿ではハンガリーにおけるロマを事例とし、ロマの人々の帰属意識と自己表象について探究する。中でもこれまで取り上げられることが殆どなかったロマニ語とハンガリー語の二言語話者に焦点を当て、彼らにとっての「われわれ」像がどのように形成されるのかそこにロマニ語がどのように関与するのかを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず第1章「用語の定義と研究対象」においてロマの人々の呼称と言語名の定義と制度上の位置づけを述べ、第2章「概念的枠組み」において本稿におけるエスニック・アイデンティティを定義し、分析において用いる言語イデオロギーの記号論的プロセス (Irvine and Gal 2000) について説明する。第3章の「ロマ人のアイデンティティとロマニ語のイデオロギー」では先行研究の分類を行い、第4章の「ロマニ語話者による自己と他者の記述」ではロマニ語の二つの方言の辞書などを一次資料としてロマのサブグループに関する記述を分類し、その特徴を分析し、第5章の「ロマニ語話者の語る『われわれ』と他者」でインタビューの概要と分類した結果を提示し考察を行う。

## 1. 用語の定義と研究対象

ロマ (Roma) という呼称は、彼らの言語であるロマニ語において自称である民族名ロム (Rom) の複数形に由来し、14カ国の代表が出席した1971年の第一回国際ロマニ連盟会議 (以下ロマニ会議と略) でジプシー、ツィゴイナーといった呼称よりも好ましいとして採用された (Guy 2001: 19)。英語のジプシーに相応するハンガリー語はツィガーニ (Cigány) で、ハンガリーにおいては差別の意味あいに関してはロマもツィガーニも同様だとされており、ロマという呼称と同様に扱われている (Dupcsik 2009)。後で詳細を述べるがロマニ語を話さないサブグループの中には、ツィガーニの方を好み、中にはロマという呼称を拒絶する場合があることもツィガーニという言葉が使われ続けられる要因となっている。したがって、本稿ではハンガリーにおいてロマまたはツィガーニと呼ばれている人々の総称としてはツィガーニ人を用い、その中でロマニ語話者についてはロマ人を用いる。ハンガリー国外の場合、ロマニ語話者にはロマ人を、ロマニ語話者以外でロマという呼称を拒む人々を含む可能性のある場合はロマ・ジプシー人を使用する。ただし直接的な引用については原典に近づける。

2003年に大規模な調査を行った社会学者 Kemény and Janky (2003) によると、ハンガリーに

おけるツィガーニ人は肌の色で識別され、また親の一人が非ツィガーニ人で肌が白くても、周囲の人々がもう一人の親はツィガーニ人だと知っていればツィガーニ人になるという。

ハンガリーでは1993年法律第77号ナショナル及びエスニック・マイノリティの権利に関する法律（以下マイノリティ法）により、ツィガーニ人は法的に少数民族として承認されており、国及び地域レベルで文化的な自治を行う少数民族自治体を設立する権利を有する<sup>2)</sup>。

2011年の国勢調査（Központi Statisztikai Hivatal 2013: 7）によるとツィガーニ人の人口は31万5千人で全体の3%にすぎないが、社会学者の推定では70~80万人であり、ハンガリーの全人口の7%から8%を占める<sup>3)</sup>。この差の一因として他者からツィガーニ人と見られていても本人はハンガリー人かつツィガーニ人、又は単にハンガリー人と答える人が多いことが挙げられる（Kemény and Janky 2003）。それには、ツィガーニ人が今でも差別されていることが関係している。「自身をロマ人だと申告する人の数は、その瞬間の人種差別の激しさにより影響を受ける。（……中略……）調査結果は、その瞬間何人がロマ人だと自己申告したいかということを示しているものであり、その数は実際に自身をロマ人だと思っている人数とは大きく異なり、周りの人がロマ人だと思っている人数に比べると、さらに大きく異なる」（Pellandini-Simányi 2011）。

2012年に行われた調査によると、ハンガリーのツィガーニ人の76%が貧困層に属し、ハンガリーの貧困層の34%がツィガーニ人である（Gábos, Szivós and Tátrai 2013: 46, 53）。

また、ハンガリーにおけるツィガーニ人が一般の人々からどのように認識されているか、統計データから紹介すると、2005年のある意識調査において「ツィガーニ人の血には犯罪者になる傾向がある」という選択肢を全体の62%が支持している（Simonovits 2006）。2009年実施の別の調査によると、「ツィガーニ人を同僚、隣人、伴侶として受け入れるか」という問いに対して、同僚としては29%、隣人としては43%、伴侶としては76%が「受け入れない」と答えている（Marián 2009: 4）。

ツィガーニ人は先祖の移住時期と母語により次の三つのサブグループに分けられる（Kemény 2000; 2004: 15）。

- ①ロムングロ（romungro）：15~18世紀前半にハンガリーに到着した人々の子孫。18世紀後半に行われたマリア・テレジア及びヨーゼフ2世による新ハンガリー人政策により、多くがハンガリー語モノリンガル話者にされ母語を失ったという。ハンガリー語で音楽家という意味のゼネース（zenész）あるいはムジクシュ（muzsikus）と呼ばれるジプシー楽師は、このグループに属する。また、モノリンガル化を逃れロマニ語を保持した人々はカルパート（kárpati）方言を話し、彼らはロムングロ、ゼネースの他、カルパート・ツィガーニ（kárpati cigány, 以下KCと略）を自称する。
- ②オラー・ツィガーニ（olah cigány, 以下OCと略）：19世紀以降にルーマニアから来た母語がロマニ語の人々の子孫<sup>4)</sup>。OCの知識人は1971年のツィガーニ人に関する社会学的調査に協力する等、マジョリティの研究者と親しい関係を築いており、1970年代から文芸界、民俗音楽で活躍した（Diósi 1988: 42, Onagy 2008, 横井2005: 185-186）。OC人にはさらに職業に由来するサブグループがあり、そのグループの言葉が方言名となっている。最初にロマニ語で執筆活動や言語教育を行ったのがOCの中の「ロヴァーリ（lovári, 以下Loと略）」と呼ばれる人々で、彼らの方言

をロヴァーリ方言（以下Lo方言と略）という。そのためか、ハンガリー国内ではロマニ語は試験や授業科目などにおいてLo語と呼ばれている。つまり、法的にはロマニ語だが、国内の運用においてはLo語と表記されている。

③ベアーシュ (beás)：19世紀以降にルーマニアから移住して来た母語がベアーシュ語の人々の子孫。ハンガリー南部のバラニャ県に多い。

ベアーシュやロムングロの多くはロマではなくツィガーニと自称する<sup>5)</sup>。

ロマニ語はインド・アーリア語派の言語を祖とする言語で、長い間、書き言葉のない口述言語であった (Matras 2002/2005: 2, 251)。ロマニ語に標準語はなく、1971年のロマニ会議で、方言に優劣をつけないことを決めている (Liégeois 1975: 307)。ハンガリーでは1993年のマイノリティ法により、ロマニ語はベアーシュ語とともにツィガーニ人の言語としての権利が保障されている。2008年には欧州地域語少数言語憲章の高度なレベルの保護も承認された。ロマニ語はまたヨーロッパの多くの国で少数言語として承認されている。ハンガリーでは1995年以降、外国語の資格試験としてロマニ語の試験が実施されている。この資格は大学の学科によっては卒業に必要な語学資格となりうる。試験名称は既に述べたように「Lo語」で、実際の試験問題もLo方言で出題されているが、解答においてはどの方言も受け入れている<sup>6)</sup>。また、公教育において民族教育の枠でロマニ語を教えることも可能だ (加藤2006: 39)。

ベアーシュ語は古ルーマニア語に近く、また現在のルーマニア南部の方言にも似ており、ハンガリーにおいてのみ法的に少数言語として承認されている<sup>7)</sup>。

ロムングロの中で述べたロマニ語のKC方言話者はハンガリーにおいては少ないこと以外は不明で、「大規模な言語取替えが行われたと推測されている」 (Szalai 2007: 43)<sup>8)</sup>。ハンガリーの国勢調査ではサブグループは考慮されず、言語もツィガーニ語として一括し、ロマニ語とベアーシュ語を区別していないため、それぞれの話者数は不明である。ロマニ語とベアーシュ語を区別している社会学的調査によると1971年の調査ではロマニ語話者はツィガーニ人全体の21%だが、2003年の調査では同話者数は8%と大幅に減少している (Kemény and Janky 2003)。

本稿ではロマの人々のうち、ロマニ語を維持しているロムングロの人々 (KC人) と、OC人を対象とする。

## 2. 概念的枠組み

民族名は民族範疇の境界において重要な役割を担っており、民族範疇の境界は他者からの「名づけ」と自己による「名乗り」の相互作用によって変更されたり、強化されたりする (名和1992: 304-308)<sup>9)</sup>。

また、Larson (1996) によれば、民族名は、エスニック・アイデンティティの境界を引く文化マーカーとして働く道具であり、一つの単語によって複雑で異種混淆性のある内容を表し、そのため多元性を見えにくいものになってしまうという。

エスニック・アイデンティティとはバルト (1996: 58-60) によると他者との相互行為によっ

て相互補完的に決定されるものであるが、ロマ・ジプシーのような多数派から閉めだされ拒否された少数集団の場合、「相互行為は優勢な多数派集団の身分と制度の枠組みの中でもっぱら行われる」(バルト 1996: 60)。

つまり、エスニック・アイデンティティとは他者との関係性によって生じる表象であるが、その力関係に応じて①自他ともに同意した形で相補的なこともあれば②他者によって強制された結果、当事者は否定することもあり③自己規定は他者によって無視された状態になっている場合がある。

しかし、アイデンティティは複合的で流動的なものだ。民族名によって一見、見えやすくなったアイデンティティをどのように位置づけ解釈したらよいのだろうか。これにはカルチュラル・スタディーズの「縫合 (suture)」「節合・分節化 (articulation)」という概念が手がかりとなる。Hall (1996b=2001: 15-16) によると、アイデンティティとはアイデンティフィケーション、出会う点、縫合の点であり、それは「呼びかけ」ようとする試み、語りかける試み、特定の言説の社会的主体としての我々を場所に招き入れようとする試みをする言説・実践と、主体を生産し、「語りかけられる」ことのできる主体として我々を構築するプロセスとの出会いの点」(Hall 1996b=2001: 15) であり、一時的な節合として理解されるという。

エスニシティという語もまた様々な定義が存在するが、本稿では、「すべての人がエスニック的に位置づけられる」(Hall 1989/1996a: 446) というホールニュー・エスニシティーズ (New Ethnicities) という概念を援用し、マジョリティのエスニック性についても同等に扱う。

以上のことから本稿ではハンガリー語とロマニ語の二言語話者の民族名へのアイデンティフィケーションが文献及び「語り」の中でどのように行われ、縫合の点となり立ち現れているかということについて見ていくこととする。

さて、エスニック・アイデンティティと言語の関係については、Irvine and Gal (2000) が言語の識別の言語イデオロギーについて論じるために提案した「言語イデオロギーの記号論的プロセス」というモデルが参考になる。この「言語イデオロギー」という用語には様々な定義が存在するがその出発点となるのは Silverstein (1979: 193) の「知覚した言語構造や言語使用を合理化または正当化するために、言語に関してその使用者が明示する信念の全て」という定義である。このうちの「使用者が明示する信念」の部分を Irvine and Gal (2000: 36) は「使用者及び、使用者以外の人々、たとえば言語の観察者も保持する信念」と修正しており、本稿もその定義に従う。

Irvine and Gal (2000: 37-38) によるこのモデルは次の三つのプロセスから構成される。

- ①アイコン化 (Iconaization)：言語の特徴と社会的な特徴が結び付けられること。
- ②フラクタルな再帰 (Fractal Recursivity)：外部における二項対立の図式(「われわれ」と「他者」の関係)が、内部においても作られること、あるいは内部の二項対立の図式が外部との関係に投影されること。
- ③消去 (Erasure)：上述のアイコン化において行われる結びつきにあてはまらないものが不要なものとして無視されること。アイコン化と消去によって社会的な特徴と言語との関係の本質化

(essentialization) が行われる。

したがって本稿では①あるエスニシティ（ロマ人、サブグループのKC人など）の認識とそれを話す人々の言葉への認識において関連付けがどのように行われているか、②どこに他者が置かれどのように見出され、二項対立が作られるか、③どのような要素が無視され、結果として、人々（ロマ人、サブグループ）の言葉と人々の関係が必然であるかのような本質化がなされているか、ということについて探究する。

### 3. ロマ人のアイデンティティとロマニ語のイデオロギー

ここではロマ人のアイデンティティとエスニック・アイデンティの関係、そしてさらにロマニ語のイデオロギーとの関係について先行研究をまとめながら検討したい。

ロマ人のアイデンティティを地理的な範囲と人口規模によって分類するならば①トランスナショナルなロマ人性（Roma-ness）、②居住国のナショナル・アイデンティティ、③サブグループのエスニック・アイデンティティ、の3つに分けられる。

①のトランスナショナルなロマ人性がロマのエスニック・アイデンティティと認識されているもので、Guy (2001: 19) などが述べるロマ人の民族創成と関連がある。このアイデアは1971年の第一回ロマニ会議に端を発するが、国際的に認知され普及したのは東欧革命後の1990年第四回ロマニ会議以降である（Herakova 2009: 284, Guy 2001: 20）。このロマ人性の創出は周縁化された人々を既存の少数民族と同じ枠組みで扱えることを意味し、欧州評議会、国連をはじめとする国際機関の支持を得ている。

ロマ人性については「同じ伝統、同じ文化、同じ起源、同じ言語を共有する一つの民族」という2000年第五回ロマニ会議における会長の宣言からも伺えるように一般にロマニ語は非常に重要な地位を占めている（Garo 2002: 154）。ハンガリーの法律においても少数民族の条件の一つとして「他と区別できる特有の言語を有し維持しようとしている」ことが掲げられていることから、既に少数民族の地位を得ているツィガーニ人は言語維持の意思を持っていると認められるように見える。しかし、実際は「ツィガーニ人はロマニ語に関心がない。」という声が後を絶たない<sup>10)</sup>。この要因について述べるためには社会主義時代のロマニ語を取り巻く言語イデオロギーを振り返る必要があるだろう。共産主義体制下の1961年ハンガリー社会党はロマニ語の言語改革を行ったり、ロマニ語の学校を設立することは誤りであるばかりかツィガーニの社会的な統合を遅らせるという内容を含む党決議を採択した（Diósi 2001: 15）。この決議を学術的に支えていたのが、ロマニ語の辞書を編纂した言語学者でツィガーニ学者として有名なVekerdíで、1970年代からツィガーニ人には独自の文化がなく、言語には驚くべきほど語彙数が少なく原始的だと論じている（Vekerdí 1988: 14-16, Szalai 1999a: 306）。これに対して、Réger (1984) は、ロマニ語は近親者とのコミュニケーションでのみ使用されるため一見、原始的に見えるが、実際は他の言語と同様、豊かなコミュニケーションができると反駁した。現在のハンガリーの人類学・社会学においては、Vekerdíは人種差別者と見なされRégerが支持されているが、一般の人々は依然と

表1 先行研究におけるツィガーニ人のサブグループに関する記述

文献：研究テーマ	視点	ロムングロ（KCを含む）に関する記述	OCに関する記述
Erdős (1958/1997)：ツィガーニ人の部族の分類	多様	KC人とロムングロを区別、KC人は最も信頼できるツィガーニ人と評価。	OC人は自分たちこそが本物のロマ人だと考えている。
Stewart (1994)：社会主義体制下におけるOCのアイデンティティ維持に関する研究	OC	「ロムングロ」という名前はロマの言語や文化を失ったツィガーニ人に対する蔑称。	伝統文化の維持に努める人々。
Mandel (2010)：KCの文化アイデンティティの紐帯に関する報告	KC	自身をロマのエリートだと感じている。	「貧しい人」と思っているがKC人の多くはOC人に無関心。

(出所) 筆者作成

してVekerdiの影響を受けている (Szalai 1999a: 306-307, Zsigó 2005: 9)。

居住国のナショナル・アイデンティティとは先に述べたマジョリティのエスニック性に呼応するものだ。既に述べたようにハンガリーではツィガーニ人と見なされる人の多くがツィガーニ人というよりハンガリー人と自己認識している。これはハンガリーに限らずロマ・ジプシー人の多くが、少数民族教育ではなく居住国の国民としてマジョリティの言語で授業を受けマジョリティの歴史を学んでいるためでもあり、ロマ人性を持つ者は同時にマジョリティのエスニック性も併せ持つ (Herakova 2009: 286)。

サブグループのエスニック・アイデンティティについては本稿で扱うロマニ語とハンガリー語の二言語話者の場合、KC方言話者とOCの方言 (Lo方言など) の話者の二種類に分けられる。そのKC方言話者とOCの方言話者に関する先行研究を表にまとめると次のようになる。

表1からKC人OC人のそれぞれが自分たちこそがツィガーニ人の中で最も優れていると思っ

#### 4. ロマニ語話者による自己と他者の記述

ここでは、ロマニ語話者による文献をもとに、自己と他者に関してどのように記述されているかということについて分析する。尚、文献はツィガーニ人一般ではなくサブグループについて言及しているものを対象とする。

対象とする文献の選択は、ツィガーニ人の執筆者が多くロマ人のエスニック・メディアとして有名だった雑誌『Amaro Drom』のバックナンバー (1991~2010)、ツィガーニの言語に関する文献目録 (Bartha ed. 2007: 308-314) と研究史を扱っている論文 (Szalai 1999b, Szuhay 2000, Landauer 2004)、書籍 (Kemény ed. 2000, Dupcsik 2009)、国立異言語図書館及び『ツィガーニ・コレクション』を有するブダペシュト市立中央図書館の蔵書、また非ロマ人も含むロマニ語教師に対して行った聞き取り調査に基づき行った。その結果、上記の目的にあてはまった作品がKC

表2 分析対象の作品の内容と著者の属性

著者名 (発表年)	文献内容	著者の属性
Romano (1994)	KC 方言辞書の前書き	KC
Romano (2002)	教育学の学術雑誌掲載エッセイ	KC
Romano (2008)	自伝	KC
Choli & Lavente (1984)	Lo 方言辞書の前書き	OC
Szépe* (1991)	Lo 方言辞書 (Rostás&Karsai 1991) の前書き	非ツィガーニ
Rostás (2001)	一般向けの『ツィガーニ人の歴史』という本	OC

(注) \*Szépe は非ツィガーニ人であるが, Lo 方言話者の Rostás 執筆の辞書の前書きを書いている。  
(出所) 筆者作成

方言話者の Romano Rácz (以下 Romano と略) の KC 方言の辞書の前書き (1994) エッセイ (2002), 自伝 (2008) で, 特に辞書の前書きに言語や歴史に関する記述がまとまって見られた。そこで, まず辞書を中心とすることにし, 比較の対象として, Lo 方言話者の関与している辞書の中から, 最も多くの教師が参考していると述べていた Choli Daróczy (以下 Choli と略) と Rostás Farkas (以下 Rostás と略) が執筆している 2冊を選んだ。しかし, KC 方言の辞書の前書きには他のグループや歴史や言語に関する記述が豊富なのに対し, Lo 方言話者の辞書の前書きには殆どない。よって, 教師の間で名前の挙がった本のうち, 個別グループについての記述が見られる Rostás (2001) の『ツィガーニ人の歴史』も対象とする。

KC 方言話者の執筆者が Romano だけなのはバランスが悪いが, 他には見つからず, Romano 本人及び他の研究者に尋ねても他にないとのことだった<sup>11)</sup>。そこで Romano は前述の 2 作品 (Romano 2002, 2008) において, それぞれ異なる意見を述べているので, この 2 作品も分析対象とした<sup>12)</sup>。

このようにして選んだ分析対象の作品の内容と著者の属性 (ハンガリー人以外のエスニシティ) をまとめると表 2 のようになる。

これらの作品について, 3 章で述べたロマ人の三つのアイデンティティに関わる民族名と言語, 方言の記述を手がかりにまとめると表 3 のようになる。

ここから読み取れるように, KC 方言話者である Romano の一連の作品においては, ツィガーニ人同士の対立関係が常に描かれている。言語に関しても, OC の Lo 方言と KC 方言の違いが強調され, KC 方言の借用語の少なさ, 純粋さが主張されている。また, KC 人の方がハンガリー人に近いと述べたり, 文化を保持しようとする OC 人を批判したり, まるで主流社会におけるネガティブなツィガーニ人像是 OC 人に起因するかのような書き方をしている。ハンガリーにおける「非ツィガーニ人 (ハンガリー人)」対「ツィガーニ人」の関係がツィガーニ人の内部で「非 OC 人 (=KC 人)」対「OC 人」という形で再現されているかのような「フラクタルな再帰」が見出される。

一方, OC 人の Lo 方言の母語話者が関与した作品においてはツィガーニ人の他のサブグループに関して殆ど言及されていない。代わりに OC 人が「最も伝統を守り」「Lo 方言が最も普及」し

表3 ロムングロ (KCを含む) とOC人, ロマニ語に関する記述

著者属性	著者名(年)	ロムングロ (KCを含む)	OC	ロマニ語と方言関連
KC	Romano (1994)	多少なりともマジョリティの規範を受け入れている.	「OCの風習の維持はKCがハンガリーで築いた関係に悪影響を及ぼす。」	「KC方言はハンガリー語スラブ語, イタリア語などから借用語を有するが外部の影響が最も少ない言葉である.」「Lo方言は最も広範囲にわたり使用されている.」
	Romano (2002)	思考や生活様式もハンガリー人に近づいたものがいた.	「オラーとKCは仲が悪い.」	「ハンガリーのKC方言はイタリア語に似ている.」
	Romano (2008)	他のツィガーニに対して排他的. 他の村のKCにも排他的なことが多い.	OCとKCの対立関係の他, 多様な個人的なエピソードを紹介.	「Lo方言の辞書がツィガーニ語(ママ)の名前で出版されたが, これはKC方言と全く異なる.」
OC	Choli & Lavente (1984)	なし	なし	「Lo方言はツィガーニ人の共通語と見なされている.」
非ツィガーニ	Szépe (1991)	なし	なし	「Lo方言は最も普及し最も進んでいる…」という大学のロマニ語講師の声を紹介.
OC	Rostás (2001)	先祖のハンガリーへの到着時期と言語についてのみ言及.	「最も伝統を守る.」	「Lo方言が最もインドの言葉に近い.」

(注) カギ括弧のないものは長文を筆者がまとめたもので, カギ括弧つきは直接の引用の翻訳を表す.  
(出所) 筆者作成

ているなどOC人の文化と言語を肯定的に評価するに留まっている. しかし, その結果, Romano (2008) が批判するようにOCの言語であるLo方言がツィガーニ人を代表するかのような印象を与えている.

## 5. ロマニ語話者の語る「われわれ」と他者

ここでは筆者がロマニ語話者に対して行ったインタビュー及び参与観察における発言をもとに民族名と言語, 起源をコードとして語りの内容を整理し分析を行う.

### 5.1 インタビューの概要と語り手のプロフィール

インタビューは2009年から2011年にかけて14人のロマニ語話者に対して行った. インタビュー対象者とは, 友人の紹介やイベントを通じて知り合った. 相手の都合によりそれぞれのインタビューののべ所要時間は一人につき1時間半から30時間とばらつきがある.

表4 インタビュー対象者のプロフィール

	帰属	性別	年齢	最終 学歴	母語	使用言語		ロマニ語の使用場面
						家庭内	子供	
A	KC	男	50代	高卒	R(KC)とM	M	M	友人と兄(B)
B	KC	男	50代	高卒	R(KC)とM	M	M	友人と弟(A)
C	KC	男	30代	高卒	R(KC)R(Lo)とM	M	M	友人と妻の親戚
D	KC	女	40代	高卒	R(KC)とM	M	M	10年以上話していない
F	OC	女	30代	大卒	R(LoとKC)とM	M	M	友人, 仕事
G	OC	女	40代	高卒	R(Ce)とM	M	M	友人, 仕事
H	OC	男	60代	大卒	R(Lo)とM	MとR(Lo)	MとR(Lo)	友人, 仕事
I	OC	男	70代	大卒	R(Lo)とM	M	M	友人, 仕事
J	OC	男	50代	高卒	R(Lo)とM	M	M	友人, 仕事
K	OC	女	40代	大卒	R(Ce)とM	M	M	友人, 仕事
L	OC	女	40代	大卒	R(Ce)とM	M	M	友人, 仕事
M	OC	男	30代	高卒	R(LoとCe)とM	MとR	いない	家族, 友人, 仕事
N	OC	男	40代	高卒	R(Lo)とM	M	M	友人, 仕事
O	OC	女	40代	大卒	R(LoとCe)とM	MとR(Ce)	M	友人, 仕事

(注) 言語の省略記号はM: ハンガリー語, R: ロマニ語, Lo: ロヴァーリ方言, KC: カルパート方言, Ce: ツェルハリ方言 (OCの方言の一つ).

(出所) 筆者作成

誘導的な質問をできるだけ避けるため、ロマニ語の教育、政策、現状についてどう思うか等、ロマニ語に関するオープン・エンドな質問を行い、そこから内容に応じて質問を重ねるという方法をとった。彼らの主なプロフィールは表4のとおりである。

このうち、他のサブグループに関して自分の意見を述べたのは8名（表の上から8人、Iさんまで）だった。残りの6人は全てOC人で、いずれもロマ人の共通語としてのロマニ語を前提に話をしており、どの方言も理解できると述べていた。この6人中3人は他のグループについて殆ど何も知らず、残りの3人は、知っていたが、他のグループの人々については本を見せたり、自分よりも詳しい人（例えば他のグループの知人）を紹介したりして、自分の言葉で意見を述べることを避けた。よって以降は上述の8人のデータについて論じる。

尚、A、Bは高卒だが年齢を考えると高学歴に属し、Cを除くといずれも高学歴に属する。インタビューは語り手の職場または自宅で行い、使用言語はハンガリー語で、二人称は希望により全て親称を用いている<sup>13)</sup>。また、B、C、Dは首都ブダペシュトからバスで2時間ほどの村に住むため、そこで実施し、それ以外の人々はいずれもブダペシュト在住なので同市内で実施している。またC、DとはB同伴でD宅でインタビューを行った。Dは出産以来、10年以上ロマニ語を話していないとのことだったが、Bのロマニ語での質問に対してハンガリー語で答えており理解できていることは確認している。

表5 OC人とKC人のロマニ語話者による語り

属性	語り手	非ツィガーニ人関係	ツィガーニ人関係	言語に関する認識, 評価など
KC	A	・ウィーンとブダペシュト (a1)	・KC人とハンガリー社会 (a2) ・KC人とヨーロッパ人の文化とOC人とインドの文化の比較 (a3)	・KC語 (ママ) とロマニ語 (a4) ・OCのことば, ルーマニア語 (a5)
	B	・ハンガリー人 (b1)	・KC人, OC人, ベアーシュ人間の通婚について (b2)	・KC語 (ママ) とOCの方言とルーマニア語, (b3)・KC語とハンガリー人 (b4)
	C	・ハンガリー人 (c1)	・OC人の歴史家 (c2)・OC人とツィガーニ自治体 (c3)	・OCの方言 (c4)
	D	(Cに賛同)	・OCの知識人 (d1)	・KC方言とインドの言語 (d2)
OC	F	・ロマニ語を学ぶハンガリー人 (f1)	・ツィガーニのグループ間の対立関係 (f2)と友好的な事例 (f3)	・KC方言とLo方言 (f4) ・国際会議での方言使用 (f5)
	G	なし	なし	・KC方言とLo方言 (g1)
	H	・ハンガリー人 (h1)	・ベアーシュ人とロマ人 (h2)	・各方言 (h3)
	I	・他の少数民族, ドイツやクロアチア民族 (i1) ・マジョリティ, ユダヤ人 (i2)	・KC人と言語継承 (i3) ・ベアーシュ人とロマ人 (i4)	・KC方言 (i5) ・ロマニ語と英語 (i6)

(出所) 筆者作成

表に書ききれなかった言語的なプロフィールを補足すると, Cの妻はOC人だが, ロマニ語を話さないモノリンガルである。また, OC人のFの親は家庭内でロマニ語を話さなかったが, KC人の多い村で生まれ育ったためKC方言を自然に学んだが, 大人になってLo方言を学び現在はLo方言で翻訳などの仕事をしている。彼女にとってはLo方言とKC方言は異なるが, それでも同じロマニ語であり, ロマニ語を母語だと感じている。

## 5.2 調査結果の分類方法

8人の語りを民族名と言語をもとに整理したところ, ハンガリー人以外の非ツィガーニ人に関する言及もあったため, まず大きく非ツィガーニ人とツィガーニ人, 起源と言語に関する認識という項目で分類した(表5参照)<sup>14)</sup>。非ツィガーニ人については言及している民族名のみを示し, ツィガーニ人に関しては民族名のほか簡単な内容を示し, 言語については言及されている言語についてのみ示し対応する具体的な発言内容については対応する記号について別に表6にまとめた。

表6 発言内容

	発言, またはその内容
a1	「(息子の住む) ウィーンには差別があるが, ここブダペシュトにはない. 西欧よりもいい。」
a2	「われわれKC人はハンガリー民族の習慣を取り入れ, ハンガリー社会に溶け込んだ」
a3	「KC人はヨーロッパ人, ハンガリー人と同じように埋葬するがOC人はインド人と同じように埋葬する」
a4	「KC人の言葉が世界における本物のロマニ語だ」
a5	「カルバート人の会話をOC人に聞かせても30%しかわからない. OC方言は30%だけKC方言で70%はルーマニア語だからだ. OC人はルーマニアで奴隷になったためルーマニア語化が進んだ。」
b1	「ハンガリー人みたいにきちんとした家に住んで, 同じように働いて完全にハンガリー人になったつもりでいた. でも今, 近所の子供達にツィガーニ人だと言って囃し立てられる。」
b2	「昔はKC人はKC人同士で結婚していた. 今は伝統にうるさくないのでCさんのようにOC人やベアーシュと通婚がある。」
b3	「われわれ(KC人) の言葉が本物だ. OC人の言葉はルーマニア語の割合が高い. 30%から50%がルーマニア語だ。」
b4	ロマニ語を話さなければ, ハンガリー人が受け入れてくれると思ったため両親の世代は子供の前では使用しなかった.
c1	「ハンガリー人から差別されている。」
c2	OCの歴史家から彼の著書をもって読んでしたのでサブグループに関する知識はあるが, あまり詳しいことは知らない.
c3	「KC人もOC人のようにツィガーニ民族自治体を作るべきだ。」
c4	「妻はOC人だが, 親戚でロマニ語ができる人はお年寄りの二人しかいない. はじめは彼らが何を言っているかよくわからなかったが, 今は全てわかるようになった。」
d1	OCの知識人に会ったことがあり好印象を持っている.
d2	「友人がインドに行ったとき, インドの人とロマニ語で話して通じた. だからBさんの言うとおりに, KC方言が本物なのかもしれない。」
f1	(ロマニ語を学習するハンガリー人について) 19世紀にロマニ語を習ったオーストリア・ハンガリー帝国のヨーゼフ大公のようにツィガーニ人への理解と愛情のもとに行うのなら尊敬しなければならない.
f2	(ツィガーニ人のグループ間の仲の悪さについて) 「残念ながらインドからカースト制度も持ってきてしまった。」
f3	「ハンガリーにもグループを超えて仲良くしている村がある. 福音派の牧師がそういう素晴らしいコミュニティを作った。」
f4	Lo方言を習った後, KC方言が理解できることに気付き, 子供のとき自分が話していたのがKC方言だと知った.
f5	国際会議では, みんな自分の方言を広めることを望んでいて間違っていると指摘しあっているが, 互いに相手の方言を理解できるのだから各自が自分の方言を使っていはいはずだと考えている.
g1	「KC方言は, かなりLo方言と異なるが, 理解できる。」
h1	ハンガリーは差別がなかった稀な国で, それゆえハンガリーではツィガーニという言葉が蔑称になっていない.
h2	ベアーシュ人は学校を作る等とても賢い. ロマニ語を話さないのに自身をツィガーニ人だというのは少し変だとは思いますが, われわれはツィガーニ人になりたい人なら誰でも受け入れる.
h3	どのロマニ語の方言で話しても理解できる. 実際, 国際会議ではロマニ語が共通語だ.
il	「ツィガーニ人も他の少数民族, ドイツやクロアチア民族と同じ水準で教育を受けられるようにならなくてはだめだ。」

i2	ツィガーニ人が「少数民族」の枠内でしか行動できないのに対しユダヤ人はマジョリティとして活躍できるし、実際活躍している。少数民族になることを断ったユダヤ人は賢かった。
i3	「KC人は言語の継承に興味を持っていない。」
i4	ベアーシュ人はルーマニアでロマニ語を喪失したのではなく、最初からロマニ語を話さなかったと思っている。しかし、ツィガーニ人同士で争っていると思われたくないので、特に主張したくない。
i5	「KC方言はハンガリー語化されているが、理解できる。」
i6	(ロマニ語の標準語や表記に関して) 統一する必要はなく、英語のように(アメリカ英語、イギリス英語等のように) 大きくまとまって調和できたらいい。

(注) カギ括弧があるものは翻訳した発言からの引用で、カギ括弧がないものは会話のやりとりをまとめたものである。

(出所) 筆者作成

### 5.3 考察

表6の (b4) の発言とDのエピソード (子供が生まれてから話すのをやめてしまったこと) からはロマニ語が主流社会において二流の扱いを受けていると感じていることが伺える。それは、3章で触れた Vekerdi のツィガーニ人と言語に対する「原始的」という認識と呼応しており、ロマニ語そのものがツィガーニ人の社会的地位と結び付けられ、「アイコン化」されている。実際、彼らはハンガリー語話者でもありバイリンガルなのだが、そのことは「削除」されている。

また、様々な点で差異を強調しているAの発言においては、複数の二項対立関係が述べられている。例えば、(a4) の発言にあるように、OCの人々の言葉を「ルーマニア語」に近いと述べ排斥し、また (a3) では、OC人の文化を持ち出し、そこで劣っている言葉と劣っている人々という対立関係を見出している。そこには「ハンガリー人」対「ツィガーニ人」という対立関係の図式をツィガーニ人の内部に作るという2章で述べた「フラクタルな再帰」が見出せる。Aの語りの中ではロマニ語の共通性は「消去」されている。

KCの語り手はA>B>D>Cという順でKC方言とOCの方言の違いについての主張が強く、BはAよりも和らいだ形で差異を主張し (b3)、Dはそれに同調するような形で意見として述べているが (d2)、Cは差異よりも類似性を主張している (c4)。文化的な面でもAはKC人とOC人の差異を強調しているが、B、C、Dにはそれが見られない。

OC人の語りで共通しているのは、方言の相互理解可能性である。この主張は1章で述べた「方言に優劣をつけない」、あるいは3章で触れた「同じ言語」という宣言にも通じる。また、発言 (h2) と (i4) においては言語系統が全く異なることを理由にベアーシュ人を同じ民族と捉える政府に対して疑問を投げかけているが、それでも、「受け入れる」、あるいは「そのことを主張したくない」と述べているように、対立しないという意味が読みとれる。ハンガリー人との関係においても同様で、対立よりも友好関係が強調されている。また、発言 (i1) においてマジョリティだけでなく、他のマイノリティの存在と比較されていることも注目に値する。なぜなら、複数の他者の視点を持つ場合、二項対立とはなりにくいためだ。

## おわりに

ここでは3章から5章におけるロマ人の内部に二項対立を作る事例と作らない事例の比較により、ロマニ語の方言に優劣をつけないという思想の果たす役割について考察を行い全体のまとめとする。

本稿ではIrvine and Gal (2000) の言語イデオロギーの記号論的プロセスの中の特に「フラクタルな再帰」というプロセスを手がかりとして、ハンガリー語ロマニ語の二言語話者のアイデンティティと言語の認識の関係について論じた。

それぞれのサブグループの既存研究(3章)やKC人による記述(4章)で見られた「フラクタルな再帰」はロマニ語話者の語り(5章)において、KC人の一人からのみ明確に見出された。他の人々はサブグループ間の差異には殆ど言及しなかったり、共通性のみを語ったりするなどOC人の知識人(4章)と似ており、「フラクタルな再帰」は見出せない。OC人の語り手はサブグループについて語った全員がロマ人の内部に差異よりも共通性を見出している。その拠り所となっているのが、二項対立関係となる他者を作り出さないロマニ語のイデオロギーだと考えられる。言い換えるならば、「フラクタルな再帰」を行うには、二項対立関係となる他者が必要であるが、全ての方言がみな平等だというロマニ語のイデオロギーにおいては、他の言語にあるような「標準語」対「方言」というようなヘゲモニーのある二項対立関係を作りにくい。つまり、標準語に対する「他者」としての方言も見出されないため、内部に対立関係を創出しにくいと考えられる。もちろん先に、共通性への支持、即ち、トランスナショナルな「ロマ人性」への支持があつてのことだろうが、この「ロマ人性」を支えているのが、このロマニ語のイデオロギーだと考えられる。

## 注

- 1) 例えば、Decade of Roma Inclusion <<http://www.romadecade.org>> のプログラムなどがある。
- 2) 1993. évi LXXVII. törvény a nemzeti és etnikai kisebbségek jogairól. この法律の改訂版が2011年に公布されており、名称が変更され「民族の権利に関する法律」(2011. évi CLXXIX. törvény a nemzetiségek jogairól.)となっている。
- 3) index.hu <[http://index.hu/belfold/2013/03/28/kevesebb\\_a\\_vallasos\\_tobb\\_a\\_cigany/](http://index.hu/belfold/2013/03/28/kevesebb_a_vallasos_tobb_a_cigany/)> 2013年4月26日アクセス。
- 4) オラーの英訳はVlaxでワラキアを意味する。
- 5) 横井(2005: 182)にはベアーシュもロマと自称することが多いとあるが、Szalai (1997), Pálmainé Orsós (2007: 54), 及び筆者が2010年に実施したベアーシュの知識人へのインタビューによると、ベアーシュ語を話すベアーシュは「ロマではなくツィガーニだ」と主張する。ロムングロの場合、音楽家がロマの呼称を嫌がった(Szuhay 2002: 23)。
- 6) 2009年9月、2011年9月に個別に実施した3人の試験官へのインタビューによる。
- 7) ベアーシュ語とルーマニア語との関係については2008年9月フランスの言語学者Marcel Courthiadeの談話による。
- 8) ベシウト県の言語島の村とノーグラード県などに同方言の話者が住んでいる(Landauer 2004: 15)。
- 9) 本稿で述べる民族名とは英語でいうethnonymに相応し、民族として承認されているかどうかということとは無関係でいわゆる民族範疇の下位グループの名称も含む。

- 10) 2009年に筆者が実施したインタビューにおいて、ハンガリー教育省のロマ担当官(ロムングロのハンガリー語モノリンガル話者)及び欧州地域語少数言語憲章の実施状況について報告書を作成した法律学者(非ツィガーニ人)は、「ロマ人は言語の保護に興味はない」と述べている。
- 11) 2011年3月、筆者がELTE大学でRomanoの講義を受けていた際、授業中に質問した。本文中の研究者とはベシュト県のKC方言の言語島の村で調査しているELTE大学講師のBakó Boglárkaで2011年5月に話を聞いた。
- 12) Romanoが辞書を執筆以降、他のグループのツィガーニ人と関わる仕事をするようになったことが要因と思われる。
- 13) 筆者のロマニ語能力の限界のため、ロマニ語でのインタビューは叶わなかった。ロマニ語で非ロマ人を意味するガジョという言葉からロマ/非ロマ人の対立が意識されやすいこと、また筆者がハンガリーで参加したロマニ語の授業ではガジョは「ハンガリー人」と訳されていたことから推察すると、ロマニ語で話していたら、ハンガリー人との対立関係の話題が増えたかもしれない。だが、本稿で扱うサブグループについては、ロマニ語で話したところであまり変わらないと思われる。というのは、それぞれ接点がない遠い存在のため、ロマニ語文化ではなくハンガリー語文化を介するためだ。
- 14) 紙面の都合上、一項目につき二種類までの語りを選んだ。選択においては短い発言又は会話における発話内容を短くまとめられるものを優先した。

## 引用文献

- バルト, F. 1996. 「エスニック集団の境界」青柳まちこ編訳, 『エスニックとは何か. エスニシティ基本論文選』新泉社: 23-71.
- Bartha, Cs. ed. 2007. *Cigány nyelvek és közösségek a Kárpát-medencében*. Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó.
- Choli Daróczy, J., and L. Feyer. 1984. *Romano-ungriko-Ungriko-romano Cino alavari/Cigány-magyar-magyar-cigány kisserzőtár*. Budapest: Tudományos Ismeretterjesztő Társulat.
- Diósi, A. 1988. *Cigányút*. Budapest: Szépirodalmi.
- . 2001. A cigányok nyelve. *Amaro Drom*. 11(3): 15-16.
- Dupcsik, Cs. 2009. *A magyarországi cigányság története -Történelem a Cigánykutatások Tükrében, 1890-2008*. Budapest: Osiris.  
[http://www.sulinet.hu/oroksegtar/data/magyarorszag\\_kisebbsgek/ciganyok/a\\_magyarorszag\\_ciganysag\\_tortenete/](http://www.sulinet.hu/oroksegtar/data/magyarorszag_kisebbsgek/ciganyok/a_magyarorszag_ciganysag_tortenete/), accessed May 3, 2013.
- Erdős, K. 1997. A Magyarországi Cigányság (Magyar Néprajzi Közlemények III.1958). In Vajda, I. ed. 1997. *Periférián*. Ariadne Kulturális Alapítvány: 75-89. (1958年初出.)
- Gábos, A., Szívós, P. and A. Tátrai. 2013. Szegénység és társadalmi kirekesztettség Magyarországon, 2000-2012. *Egyenlenség és polarizálódás a magyar társadalomban*. Budapest: TÁRKI: 37-60.
- Garo, M. 2002. La langue rromani au cœur du processus d'affirmation de la nation rrom. *Hérodote*. 105(2): 154-165.
- Guy, W. 2001. Romani Identity and post-Communist Policy. In Guy, W. ed. *Between Past and Future: The Roma of Central and Eastern Europe*. Univ of Hertfordshire Press: 3-32.
- Hall, S. 1996a. New Ethnicities. In Chen, K. H. and D. Morley eds. 1996. *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*: 441-449. (1989年初出.)
- Hall, S. 1996b. Introduction: Who Needs Identity?. In Hall, S. and P. D. Gay eds. *Questions of Cultural Identity* London: Sage: 1-17. (=2001. 宇波彰訳, 「誰がアイデンティティを必要とするのか?」『カルチュラルアイデンティティの諸問題』大村書店: 7-35.)
- 花崎皋平. 2001. 『増補 アイデンティティと共生の哲学』平凡社.
- Herakova, L. L. 2009. Identity, Communication, Inclusion: The Roma and (New) Europe. *Journal of International and Intercultural Communication*. 2(4): 279-297.
- Irvine, J. T. and S. Gal. 2000. Language Ideology and Linguistic Differentiation. In Kroskrity, P. ed, *Regimes of Language*. Santa Fe: School of American Research Press: 35-84.

- Karsai, E. and Gy. Rostás-Farkas. 1991. *Cigány-magyar, magyar-cigány szótár*. Budapest: Kossúth.
- 加藤由香子. 2006. 「ハンガリー語中国語二言語小学校の設立に関する一考察」『ククロス：国際コミュニケーション論集』3：35-52.
- Kemény, I. 2000. Ananyelvi Csoportok. In Kemény, I. ed.  
 ———. ed. 2000. *A Magyarországi Romák*. Győr: Útmutató.  
[http://www.sulinet.hu/oroksegtar/data/magyarorszag\\_i\\_nemzetisegek/altalanos/valtozo\\_vilag\\_sorozat/a\\_magyarorszag\\_i\\_romak/index.htm](http://www.sulinet.hu/oroksegtar/data/magyarorszag_i_nemzetisegek/altalanos/valtozo_vilag_sorozat/a_magyarorszag_i_romak/index.htm), accessed June 15, 2013.
- , and B. Janky. 2003. A 2003. évi Cigány felmérésről népesedési, nyelvhasználati és nemzetiségi adatok. *Beszélő*. <http://beszelo.c3.hu/03/10/07kemeny.htm>, accessed May 27, 2013.
- Központi Statisztikai Hivatal. 2013. *2011. évi népszámlálás*.  
[http://www.ksh.hu/docs/hun/xftp/idoszaki/nepsz2011/nepsz\\_orosz\\_2011.pdf](http://www.ksh.hu/docs/hun/xftp/idoszaki/nepsz2011/nepsz_orosz_2011.pdf), accessed April 26, 2013.
- Landauer, A. 2004. Utak és problémák a Magyarországi cigánykutatásban. In Nagy, A. and R. Péterfi eds. *A Feladatra készülni kell*: 13–46. Budapest: Országos Széchényi Könyvtár: 13–46.
- Larson, P. M. 1996. Desperately Seeking ‘the Merina’ (central Madagascar): Reading Ethnonyms and Their Semantic Fields in African Identity Histories. *Journal of Southern African Studies*. 22(4): 541–560.  
<http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=aph&AN=9702062914&site=ehost-live>, accessed July 17, 2013.
- Liégeois, J.-P. 1975. Naissance du Pouvoir Tsigane. *Revue Française de Sociologie*. 16(3): 295–316.
- Mandel, K. 2009. Kárpáti romák identitásörzési stratégiái a Pilis völgyében. In Karmacs, Z. and A. Márku eds. *Nyelv, identitás és anyanyelvi nevelés a XXI. században*. Ungvár: PoliPrint: 101–106. <http://mek.oszk.hu/08100/08145/08145.pdf>, accessed May 4, 2013.
- Marián, B. 2009. Milyenek a cigányok? – közvélemény-kutatás a „cigánykérdésről”. *Jel-Kép*. <http://www.marketingcentrum.hu>, accessed April 29, 2013.
- Matras, Y. 2005. *Romani: a linguistic introduction*. Cambridge University Press. (2002年初出.)
- 名和克郎. 1992. 「民族論の発展のために：民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57(3): 297–317.
- Onagy, Z. 2008. Augusztus 21 - Lakatos Menyhért. *Irodalmi Jelen*.  
<http://www.Irodalmijelen.hu/node/176>, accessed May 6, 2013.
- Pálmáiné Orsós, A. 2007. A beás nyelv Magyarországon. In Bartha, Cs.ed.: 52–70.
- Pellandini-Simányi, L. 2011. Mire jók, és mire nem jók az etnikai adatok. IDEA Intézet.  
[http://www.ideaintezet.hu/sites/default/files/Mire\\_nem\\_jok\\_a\\_nepszamlalas\\_etnikai\\_adatai\\_Simanyi\\_IDEA.pdf](http://www.ideaintezet.hu/sites/default/files/Mire_nem_jok_a_nepszamlalas_etnikai_adatai_Simanyi_IDEA.pdf), accessed May 27, 2013.
- Réger, Z. 1984. A cigányság helyzetének nyelvi és iskolai vonatkozásai. Álláspontok és viták. *Szociálpolitikai Értesítő*. 2: 140–174.
- Romano Rácz, S. 1994. *Kárpáti cigány-magyar, magyar-kárpáti cigány szótár és nyelvtan*. Budapest: Balassi.
- . 2002. A Roma kisebbség és a társadalmi kohézió. In Reisz, T. and M. Andor eds. *A Cigányság társadalom ismerete*. Pécs: Iskolakultúra: 70–89.
- . 2008. *Cigány sor*. Budapest: Osiris.
- Rostás-Farkas, Gy. 2001. *A cigányok története*. Budapest: CTMT.
- Silverstein, M. 1979. Language structure and linguistic ideology. In Clyne, P., Hanks, W. and C. Hofbauer eds. *The elements: a parasession on linguistic units and levels*. Chicago: Chicago Linguistic Society: 193–247.
- Simonovits, B. 2006. Továbbra is erős roma-ellenes előítéletek. *Tárkitekintő – Sajtóanyagok*.  
<http://www.tarki.hu/tarkitekinto/20060201.html>, accessed May 3, 2013.
- Stewart, M. S. 1994. *Daltestvérek: az oláh-cigány identitás és közösség továbbélése a szocialista Magyarországon*. Budapest: T-Twins.
- Szalai, A. 1997. A “mi” és az “ők” határai, avagy a beások “belülről”. *Regio*. 1: 104–126.
- . 1999a. linguistic human rights problems among romani and boyash speakers in Hungary with special attention to education. In Kontra, M., Skutnabb-Kangas, T., Phillipson, R. and T. Várady eds. *Language: A Right and*

- a Resource*. Budapest: CEU: 297–315.
- . 1999b. Szociolingvisztikai szempontok a magyarországi cigánykutatásban. *Educatio*. 2: 269–285.
- . 2007. Egységesség? Változatosság? A cigány kisebbség és a nyelvi sokféleség. In Bartha, C. ed.: 20–51.
- Szépe, Gy. 1991. Előszó. In Karsai, E. and Gy. Rostás-Farkas: 5–8.
- Szuhay, P. 2000. Néprajzi és kulturális antropológiai kutatások. In Kemény, I. ed.
- . 2002. Akiket cigányoknak neveznek. In Reisz, T. and M. Andor eds. *A Cigánység társadalom ismerete*. Pécs: Iskolakultúra: 9–31.
- Vekerdí, J. 1988. The Gypsies and the Gypsy problem in Hungary. *Hungarian Studies Review*. 15(2): 13–26.
- Vermeersch, P. 2005. Marginality, Advocacy, and the Ambiguities of Multiculturalism: Notes on Romani Activism in Central Europe. *Identities*. 12(4): 451–478.
- 横井雅子. 2005. 「時代と地域に適応しながら生きる音楽—ハンガリーのロマ—」櫻井哲男, 水野信夫編『諸民族の音楽を学ぶ人のために』世界思想社: 169–189.
- Zsigó, J. 2005. Feltárni és megnevezni az elnyomások direkt rendszerét. In Neményi, M. and J. Szalai eds. *Kisebbségek kisebbsége*. Budapest: Új Mandátum: 7–41.



